

## 高橋和巳「自己批判」概念にみる「葛藤」の思想

——「大学教員」のレゾン・デートル「再考」を射程に——

上 坂 保 仁

### A Study of the thought concerning 'Conflict' in 'self-criticism' in Kazumi Takahashi

— 'Reconsideration' of the 'raison d'être' of 'University Teacher' —

Yasuhito UESAKA

#### [邦文要旨]

本論文は、「戦後」教育体制における「大学」の史的展開にあって、「大学教員」をめぐる根源的問題性と課題に真摯に向き合い続けたと約言可能な「作家」高橋和巳を俎上に載せる。高橋の精神的態度は、常に自己省察、内省に由来し、あるいは伴奏され、ある種の「自己批判」と向き合い続けることの内にあったといえる。「知識人」とは何か、民衆とは何か、市井とは何か、人間とは何か。高橋がそれらを問い究明していくためには、頻々に自らを切り刻まねばならなかった。自身が寸分たりとも希わない「知識人」という階層的意識に纏わる桎梏。なかでも、高橋によって示された「大学教員」のレゾン・デートルへの照射に連なる「知識人」論の諸相からは、実存的苦悩の連続と連鎖を生起させる「葛藤」の思想が指摘されてくる。それはあたかも、不易流行を越境する次元で、かれにみる純粹性の希求が浮かび上がる。ゼロ年代を経た現在、「大学教員」をめぐる状況とは、人間（存在）の根源的問題を照らし抉るそれらめぐる、はたして何らかの解決を経た後の状況なのであろうか。端的には特に、つまるところ「バブル経済」なる資本主義の状況と連動するいわば「80年代の大学」（あるいはおよそ「80年代の大学生」的「感覚」と呼んでもいいもの）の延長線上にある思想潮流に象徴的であろうし、そのことは「戦後」教育体制における「大学」の史的経験を省みることすらない、それら潮流を内包した当の「大学教員」自体に第一の問題が存するのではあるまいか。それら問題意識をめぐる解決への希望を含めながら、いま一度本稿において、「大学教員」のレゾン・デートル「再考」のために、高橋の提示した幾多の問いから浮かび上がる思想的特徴と現代的意義を論じていく。

#### [英文要旨]

#### Résumé

This paper analyses the thought of Kazumi Takahashi, especially, his thought concerning 'Conflict' in 'self-criticism'. In this study, one of the purposes is, as it were, the 'reconsideration' of the 'raison d'être' of 'University Teacher' in perspective. Now it passed over the first decade of the 2000s, and the necessity of those problems will have to be reconsidered once again. Because it's far from solution. What is 'intelligentsia' ('интеллигенция')? What is 'public' in the modern? What is 'people'? Ultimately, moreover, what is man? The revolt with anger and sadness against class-consciousness in itself afflicted the consciousness of Takahashi. By analyzing that 'Conflict', a modern meaning will be also, actually expected feature in concerning some thoughts. And it will be stand in a row some educational thoughts.

\* \* \*

マルクスはあるところで、「人間は自ら解決しうる課題をしかもちえない」と言い放っています。(中略)人間にとって、課題は課題でしかなく、それは解かれるためにのみぼくたちの前に立ちただかっているのでしょう。課題について無知であっては話になりません。しかし課題の内容が把握したら、それは解決に向かうはずで。あと必要なのは大胆さと人間的な努力だけでしょう。ぼくは勇気をもって努力してみるつもりです。

(奥浩平『青春の墓標』)<sup>1)</sup>

星の流れに 身をうらなって  
どこをめぐらの 今日宿  
荒む心で いるのじゃないが  
泣けて涙も かれ果てた  
こんな女に誰がした

(菊池章子・歌「星の流れに」)<sup>2)</sup>

## 1. 序論

### ——問題の所在、または「戦後」への無自覚が招来するもの

現代の「大学教員」の「すがた」をどのように語りますか、「大学教員」とはいかなる類いの人間なのでしょう。か、などと問われるや、即答に窮する。たくさんの、違和感ともつかない、違和感以前の、「疑問」がわいてくる。近代日本の「大学」の史的展開のなかで、文字通り紆余曲折の歴史的変遷を辿りながらも、概して自治と学問の独立性を基軸に醸成された大学の多くは、さほどそれら「疑問」には連ならないのかもしれない。他方、それら「疑問」の数々に直面している大学は、いささか大胆さを許されるのならば、少なくとも高度経済成長期終焉以降に設置された「大学」に照射してみるや、決して少なくないと推察可能である。もっとも論証においては、そのような二項対立的区分による問題設定自体望まれていないことを確認したうえで、概して後者の文脈に係わる「大学」における、「大学教員」なる職業人の跋扈という前提に限定しながら、論を進めたい。ここであえて概括的に、だが端的な、ごく一部を例示してみよう。それら「大学」における当世「大学」情況へ目を向けてみるや、総じていわゆる「資格取得」のための「授業」なるもの、真っ盛りである。教室内、講義で、演習〔ゼミナール〕で、日々教員が叫ぶ。ちなみにここでは、それらを主唱先導する教員の「経歴」との教育学的連関性にはあえてふれない。そのうえで、である。「資格を持っているか否かで、これからの君の人生が変わるんだよ」。別の例示。学年合同で学生が集められる大教室でも、「大学」担当者側により積極的に依頼された、その系の専門を名乗る「外部講師」「ゲスト講師」等と呼称され雇われた人間により、声高に「授業」が行なわれる。先述例示の教員群同様、学生に対する威勢はとどまるところを知らない。「まだみなさんは解らないでしょうが、企業で大切なことって何でしょうか。手が挙がらないねー。受け身はこれからは止めましょうねー。そう！挨拶ですねー。さあ、いったん席を立ち上がって大きな声で挨拶の練習をしてみましょう。ほら、オシャベリは社会人になったらありえませんよー」云々。まさに偶然、教壇に立っている人間よりも幾ばくか幾十年か後に生を享けたという暗黙（かつ教育的関係においては退避困難な「絶対」的）理由に拠って「社会人」を掲げられては、「聴か」される側としてはやり切れまい。そもそも、そのような、「大学」の場で発せられる「社会人」とはいったい何なのであろう。内田樹の慧眼は拙い序論に勇気を与えてくれる。

「どうして人は労働するのか」という根源的な問いがクリアされていない。（中略）勉強と労働はまったく別のものです。<sup>3)</sup>

あるいはまた、「授業回数」や「定期試験」をめぐる、概して現行〔2012年度時点〕「大学設置基準」（第二十一条第二項）の「遵法」を拠りどころとしながらの、「15回」厳守といった講義等「開講回数」の〈問題〉に連関して、学生に向けた「出席」日数（回数）の厳格な縛りが大学教員によって「自明」的に「推奨」されたりもする。「戦後」大学教育〔体制〕をめぐる関連諸法の成立・制定過程、あるいはそれらの内容面等の史的展開を大学教員が精確に認識しようと努めているか精査しているか否かを問わず。

とはいえ本稿にあっては、上記それらの具体的実際の如何を問うているわけではない。そこに介在する「大学教員」の在りようをいま一度あらためて論じてみようとするとき、はたして、いかような語られかた、アプローチが可能であるのか。本稿での問題の所在は、約言が許されるならば、「大学教員」それ自体にある。

いまあらためて、『〈教育〉の解読』内、「教育の本態」における田中智志の以下の明察を受け止めねばなるまい。

すべての操作的思考は、暗黙のうちに、操作対象に操作主体が服従する態度を要求する。つまり、この主体的な思考の形成がうまくいくためには、先に服従的な態度が形成されなければならない。これはパラドクスである。<sup>4)</sup>

ときに、「指導」といった教育的言説の下での、前述諸例の「推進」に顕著であろう、構造的な、学生への「積極的」な「教育的配慮」と目されるすがたと状況をめぐって、それは「大学教員」の為す「教育的活動」、あるいは、基盤たる研究活動に関するなんらかの精神的態度がどれほどまでに本来的に、真に、存在するといえるのであろうか。もちろん、ここでは、枚挙に暇がない、多種多様な、大学教員による個別的な「教育活動」（なるもの）を、まさに個別的な焦点化によって問題化していくわけではないし、およそ本稿においてそのような資格は筆者にない。直前に示した疑義とは、いってみれば、「大学教員」というレゾン・デートル〔存在理由／存在意義〕にかかわり得る問題として、である。

近代日本の大学に係わる史的展開、特に「戦後」以降、「大学教員」をめぐるそれは、あまた論じられてきた。「戦後政治」に連なる「政治」的状況、社会思想〔思想史〕との連動、端的には、「独立」前後の単独講和か全面講

和か如何を包含しながら、「60年安保」、「ヴェトナム」問題、「68年」的課題、それらに象徴的な情況と、情況内における「大学教員」の実際的行為は、そもそも行為自体が存したかを含め、主として学生からの多種多様な問題提起を通じ、浮上し、あるいは露呈した、その諸事実に目を向けることで容易に明証されよう。それら問題提起は、冒頭に例示したような当世「大学」情況に再度照射してみるならば、いたずらに過去のものとして唾棄される類いではないのではないか。「時代」が違うのだから「昔とは学生も変わったのだから」といったような、およそ明証なき前提、あるいは教条的な前提の物言いに拠って、思考停止されながら葬り去られてしまって適切な問題なのであろうか。むしろ、〈歴史〉の「連続」性・「非連続」性の解釈如何に拘らず、史的展開を経るなかで至った「現代」的問いにかかわり得る思想的要諦のひとつとして、注視の必要があるとの推断が可能ではないだろうか。あらためて大胆さをゆるされるならばそれらの問題提起は、未解決の現代的課題として、いま一度俎上に載せ、捉え直されてみる必要があるのではないか。いずれにせよ、それらの問いをめぐり、湧出し論難された諸々の問題提起から逃避することなく、自己自身の問題かつ課題として真摯に向き合い続けたと約言可能な人物のひとりとして、「作家」高橋和巳（たかはし かずみ 1931-1971）をとり上げてみたい。高橋は、人間（存在）の根源的問題を照らし抉った。ゼロ年代を経た現在、「大学教員」をめぐる情況とは、はたして、上記問題提起をめぐった何らかの解決を経た後にあらわれた新たな情況なのであろうか。端的には特に、つまるところ「バブル経済」なる資本主義的情況と連動する'80年代的「大学」（あるいはおよそ「80年代的大学生」的「感覚」と呼んでもいいもの）の延長線上の思想潮流は、さして真摯な内省なく、いや、意図的に見過ごされながら、先述した「戦後」における「大学」の史的経験を省みることすらない、当の「大学教員」自体に第一の問題が存するのではあるまいか。いずれであれ、本稿では、提示された諸々の問題のなかでも、「大学教員」というレゾン・デートルへの照射に連なる「知識人」論をめぐっての高橋の言辞を中心に、共通項としての思想的特徴を〈批評〉的手法で指摘し、問題設定自体が孕む問題の根源性を忘却することなく、自己省察を含めながら、高橋の提示した問いの現代的意義を論じたい。

私は怒っているわけではない。悲しんでいるだけである。（中略）その汚穢の度合いを比較しあってみたところで何事も解決しはしない。ただ、学者も広くは表現者に含まれるその表現者が、これまであまりにも表現とは何かを考えなすぎた。その怠慢

が自ら墓穴を掘ることとなったことの意味はせめてものこととして考えつめねばならない。<sup>5)</sup>

## 2. 市井の民と「知識人」という桎梏

### ——高橋における自己省察の基層をめぐって

周知のように、「中国古典文学」を主たる研究内容<sup>6)</sup>としながら、自らの辞職まで「大学教員」として奉職した高橋は、1960年代の「学生運動／学園闘争」と共に教員生活を送ったといっても過言ではない。特に、1962年の『悲の器』<sup>7)</sup>上梓、第一回「文藝賞」（河出書房新社主催）受賞以降、揺るぎない。

「戦後」の「政治の季節」なる時空は、とりわけ「政治」的情況の実際的具体的変遷の如何におよそ拘わらず、京都大学における学部学生・大学院学生（院生）時代以来、高橋自らに影響を及ぼし、あるいは創り出しつづけた。とはいえ、高橋にとって、「政治」的情況で当座注目を浴びがちな、組織や党派〔セクト〕の時系列的な離合集散といった情報の知識はさして意味をもたない。情報の時系列的羅列という、表出する概して可視的な結果なる諸々を鵜呑みにすることに高橋は懐疑的である。いわゆる「ニュー・レフト」陣営に顕著な党派間の先鋭化した対立が深刻の度を増す1970年、商業誌『エコノミスト』に発表された「内ゲバの論理はこえられるか」内の以下に内包された真意はなにか。「生き身の人間としては、かけがえのない自己の実存の重みや、避けえない試行錯誤、そしてある行動に踏みきることと、その結果との間に大きな溝のあいてしまうことを熟知し、それを覚悟のうえで行動しておりながら、歴史上の人間の事情に対しては、ともすれば結果からすべてを判断してしまう」<sup>8)</sup>。高橋がまさに日常的に情況内にあった「政治の季節」なる時空は、放置できない問題（意識）、看過し得ない問題（意識）を次々と生起させ続けるばかりである。連ねて端的な問いを提示してみるならば、標記される「戦後」とは、いったい誰の、どのような人間にとっての「戦後」なのか。「戦後」を記述することが可能な人間にのみ限定された「戦後」ではないのか。現実の情況、生活、その礎たる思想構造までも、折に触れ往々にして「民衆」「大衆」とは乖離した「知識人」から逃れられない自身の存在、あるいはその総体としての「インテリ」（〔インテリゲンツィア〕 интеллигенция）なる社会的階層（「階級」）から逃れられない自身の存在とはいったい何なのか。自己を斬り刻みながらの高橋による問いかけは時間と共にますます膨らむことはあれ、けっして棄て去られることはなかった。かれが形容された数々の言葉、すなわち、まさに「憂鬱」、「苦悩」、「葛藤」といった渦の深奥へおのずから没入していく。「民衆」「大衆」を構成する個別



的な民にとってほんとうの「戦後」とは何なのか。市井の民の生活と「大学教員」なる存在自体との激しい違和感……。顕在的ではなくとも根源的に、自らが学生として、また「大学教員」として、「高等教育」なる機関（空間）にかかわってきた高橋から、少年期を育んだ大阪の市井とそれら風景を彩る思想性は、おぼろげであっても忘却されることはなかった。<sup>9)</sup> 高橋にとっていかなる場面においても外部に措くことのできなかつた関心は、あくまでも情感や情念を内包した個人的な、生きる人間（生きていく人間、生きていかねばならない人間）の為す行為、あるいは為さざるひたすらに観念的な人間のありかたをも含め、その文脈にみる状況であり、同時にそれらは自らの思想的問題、また課題として、熾烈なまでに生涯かれを縛った。「知識人」の定義をめぐる多義性を確認しながらも、高橋が「自己批判」的に問うた「大学教員」に顕著な「知識人」の思考のありよう（思想構造）は、ときに「苦悩教の教祖」と評された適切性如何を問わず、上記意味での「知識人」に対する激しい違和感が看取できる。同時に、ひるがえって、（後に着目する中心的論点だが）「社会的」には同じく「知識人」と目される自身の身の置きよう（態度）をめぐるは、他律的であることを諒とせず、それとともに、他者に対する権威主義的要素の忌避と回避をひたすら配慮する「対自」的な徹底的自己省察という苦悩（実存的苦悩）の連続と連鎖に、文学的視座とも約言可能な特質が看取できる。これらについては次節以降あらためて俎上に載せ詳らかにするが、直前の特質からは、つまるところ「政治」的イデオロギーに埋没しなかつた高橋の精神的態度とその深遠も、ならんで想起されてこよう。川西政明のいう「作家」高橋像は上記を的確にあらわすものである。「日本近代の贖罪をにない、その罪悪の根を掘り起し（引用者注：原文ママ）、剔抉する意志をみずからに課して、人間が人間でありえることの証明を何より欲した作家」<sup>10)</sup>。

「70年安保改定」（阻止）に端を発する諸問題、あるいは全共闘運動興隆とは時間的にも未だ若干の余裕ある、『悲の器』発表の翌1963年、『中央公論』10月号に高橋の論文が掲載される。「失明の階層」と題されたそのなかで、市井の民とされる「取り残された人々」を論じるにあって、民と「大学」（という〈世界〉）との隔絶を、鋭く指摘する。ダンテの『神曲』における、絶望からも隔離された人間たちを冒頭に提示し、つづいて西洋近代思想史の史的展開を交えつつ、「科学的社会主義」を標榜する「マルクス主義」の（高橋の当該論文内ではとりわけ概括的には「マルクス・レーニン主義」的党派を中心に指し示すとの総括が適当であろう）擡頭においてもまったく同様に、「落ちこぼれた一群の人々」が存在することを明示した後、隔絶の指摘をはじめめる。それは1960年代に

おける「学生」という存在への共感的視座を、同時に市井の民における苦悩を描写しようと高橋は紙幅の相当量を割く。少し長くなるが、以下にその一部を引用してみる。

プチブルの上層部や中間層のエリートたちは、〈進歩の観念〉をもつことができた。プロテスタンティズムは日々の精進と進歩の観念とを結合して中間層のひとつの救いを形成する大きな役割をはたした。合理主義、科学精神が彼らの徽章であり、それが政治的にもプチブル急進主義としてある役割をはたすことができた。

しかしそれは、無数にある職業のうち、自己の創意を何らかのかたちで職務に生かすことによって進歩の観念が虚妄でないことを実感しうる、自由業を中心とする少数の選ばれた人々にかぎられる。（中略）教育や文化の面ではたしかに積極的な役割をはたした。しかし、彼の進歩は、淘汰を前提にするものであったために、必然的に非エリート層とのあいだに大きな断絶をうんだ。

その断層は、エリート層が指導する理念社会としての学校とりわけ大学と、利害社会としての一般世間との、一種の断絶として象徴的にあらわれる。単に学生運動家ばかりではなく、すべての学生たちは、学園から社会にむけて一歩ふみだす際に、すでに一つの躓きをよぎなくされる。少数の恵まれた人々をのぞいて、学生たちは、自分が学んできた進歩の観念を検証すべき場がどこにもないことを痛切に思い知らされ、次に理念か生活かのどちらかが決定的に間違っているのだという不幸な疑問にとりつかれる。（中略）

その取り残された人々、つまりは大部分の農民、……零細企業者、大部分の女性、公務員や形ばかりのホワイト・カラー、未組織の賃金労働者など、全人口中の圧倒的多数者の唯一のよりどころは、ひたすら己れみずからのことを思いまどうエゴイズムであり、そして〈進歩の観念〉でさえかならずしも処理できなかつた「日の下になに一つ新しきことなき」日常性だったのである。譏りをも誉れをもうけない日常性、絶望的困窮というほどでもないが何も変り（引用者注：原文ママ）ばえのない日々の生活。意義なき出勤と労働と、そして自分のミゼールから一時的に目をそらさんがための娯楽と気ばらし。（中略）現実暴露の悲哀はいまや特定の文人たちのものではなく、それゆえにその感情の分析はたんに文芸批評の領域にとどまることもまたできないのである。<sup>11)</sup>（傍点、引用者）

上記に顕著な高橋のまなざしは、「戦後」社会における「棄民」的情况の問題提起と、そうした「棄民」を絶え間なく生み出し続ける状況と思想性への論難である。換言すれば、総じて「自由と民主主義」の「戦後」(あるいは「戦後民主主義」が)「知識人(戦後知識人)」によりいくら標榜され主唱されようが微動だにしない「現実」の「戦後」社会における「棄民」的情况をめぐるの糾弾の言辞とも指摘可能である。<sup>12)</sup> それら状況への高橋自身による回答の模索と、解放的解決への一縷の希望的情感が看取できる。そこに楽観主義的視角は無縁である。このさい、「棄民」的情况をめぐるまなざしにあっても高橋は激烈なまでの内省を徹底する。文脈も同様、1967年発表「暗殺の哲学」の結語部は、それらを明かす端的な自己省察の言辞である。

人はふと自分が悲しいごまかしと曖昧化の中に生きていると感じないだろうか。窮極まで考えをおし進めてゆくと、判断を停止せざるを得ない領域にさしかかってしまい、それを口にする事の恐ろしさゆえに、沈黙し、方向を転換する。(中略)

もっとも平和で自由ないとなみであるはずの文学を専門的な仕事としている私にして、率直に言って、しばしば意味のさだかでない悪夢にうなされることがある。錆びてしまった古風な剣を振りあげて、霧のように形定かならぬ何物かに向けておどりかかり、しかも、次の情景では自分の死体が荒涼たる荒野に横たわって鴉の餌食になっている。(中略)そしてふと我に帰れば、私は、世界とともに、かわることなく、あまりにも愚劣なのである。

この稿には何らの結論もない。<sup>13)</sup>

それら、みてきた上記問題意識と提起は、生涯をつうじ高橋から離れることがなかった。それどころか、「大学」という機関(空間)に所属しながらの1960年代後半という世相(状況)が、ますますかれを自問の深淵にいざなう。その主たるひとつとして、みずから「大学教員」なる社会的存在である高橋は、「大学教員」という存在自体の欺瞞性を自らの問題として問いつづけるのである。

時代背景の相違や社会状況の温度差を理由に、高橋の提示した(少なくとも)精神的態度が、とりわけ現代における「大学教員」なる「存在」をめぐる根源的、原理的問いかけに連関しないのではないかとはいまにも早計に過ぎる。あらためて、いわばどのような「季節」であれ、すなわち現代にあっても、たとえば国家によって示される(法的枠組みに従った)制度的変化を反映した状況の変動のなかで、はたして直前の問いかけを「大学教

員」はじゅうぶんに解決し得たと総括できるだろうか。「最新」とされる「教育内容」、「教育方法」、さらには「教育(的)関係」が、「専門」的「研究」者たる「大学教員」によって饒舌に語られるさい、そこには、蔭に陽に、潜在的に顕在的にみえ隠れしうる欺瞞性が「大学教員」の諸活動に垣間みられはしないだろうか。「大学教員」なる「存在」自体の欺瞞性への注視を捨てておいてはいないであろうか。個的な学生という人間存在に対して、同時に市井の民という人間(の存在自体)を思考するにあつて。高橋における、市井の民と「大学教員」なる「知識人」という桎梏は、自身も社会的には同義的類似的水脈にある「知識人」自体の孕む問題性を直視するゆえである。そして高橋にとって、「戦後」にあってもなら解決されることなき諸々の「棄民」的情况とは「知識人」存在自体の問題性への直視に連なるのであり、それらめぐるの批判的言辞が情念の問題を唾棄されずに提示される。そのさい、かれにあつてはまず、批判のベクトルがひたすらに自身へと向けられた。いま一度、高橋の言辞を「非暴力の幻影と栄光」と題された論文より提示しておこう。

おもうに、〈権力〉なるものには、おのれみずからを反省する鏡がない。

ちょうど、それは、さまざまの動物をさまざまに殺すことによって成立する人間の生命と文化が、一一殺す刹那において、たとえ特定の個人が憐憫と悲哀に目をおおうことがあるにせよ——人類の文化全体として、殺してきた動物たちに対して反省したり贖罪しようとしたりしないのにあい等しい。<sup>14)</sup>

### 3. 高橋における権威主義的要素の徹底的忌避

——「大学教員」存在の欺瞞性をめぐって

#### 3. - 1. 文学的世界に投じてのアプローチ

1969年初出、高橋の代表的著作『わが解体』において顕著な、現実的、実際の場面への対峙(あるいは、状況内存在としての「参加」)を経るなかで高橋が自問しつづけた苦悩は、1960年代、1970年代当時とはその「主体」も内容も概して異なった文脈で以て「大学改革」が「提唱」されること頻々な現代にあつても、みてきた文脈にかぎっていえば、思想論的な意味を深くもちうるであろう。『わが解体』のなかで、「プロフェッショナルな知識人というもの」をめぐる、「大学教員」を視野に入れながら高橋は、「ただ、自負が専門業績から自己の地位に意識内部ですりかわるとき、旧套的感情までが権威あるもののごとく、語られ、<sup>15)</sup>と述べることで論難する。とはいえ、既述のように高橋にとっては、その問題

性を自身と遠距離な問題、他律的な問題として捉えることなどできなかった。このことは、「評論」にならんで小説においても同様の文脈であった。すなわち、諸批評・評論における言辞にあっても、あるいは架空の設定、虚構の世界の創造たる小説の一文一文、また想像上の人物設定やプロットを含めた創作過程自体においても、本節冒頭で触れた問いをめぐる苦悩は、終生高橋の脳裏から離れることがなかった。しかも、いずれの場面にあっても常に、自問の精神的態度が作品の随所にうかがえる。

長編小説『悲の器』で高橋が提示した主題のひとつは、「大学教員」という、総体としての「知識人」、のみならず個体としての一「知識人」の存在自体からの問題化であったとまとめることができる。くわえて、時間的経過とともに次第に破滅へと転落するさまは、高橋にとっては（内面的実際としては）、ひるがえって、あくなき理想的真実の希求でもあったろう。このことはいわば高橋の苦悩の極北ともいえ、後に明らかにするところである。副題に「高橋和巳論」と付された桶谷秀昭による論考内に『悲の器』をめぐる高橋の着想と意思を総括的に論じたと指摘可能な叙述がみられる。

主人公正木典嗣は、戦前のマルクス主義運動とその崩壊の時代を一学究として着々と研究成果を挙げ、恩師の姪を妻としてその後継者として大学にポストを獲得する。その陰には彼よりも学力においてまさる同僚の或る者は左傾して研究室を追われ、或る者は非合法運動に飛んで投獄され発狂する。彼は用心深く危険からは身をかわして生きる。大学社会では、こういえば危険だと思うときには慎重に沈黙を守り、また或る決断が社会正義から必要とされる局面に際しても、自分の学問のために決断を上まわるほどの決断せぬ意志とその理由となる論理をつらぬく。（中略）

高橋和巳が『悲の器』における志はようやく明瞭になる。自分を鍛えるために最大最強の敵と格闘せよ。……思想論文ならずでそこに対立すべき文献はあり、それを読み破ることによって作業は開始されるけれども、小説は事情がちがひ、格闘すべき敵をまず作者が自分の手で創造しなければならない。（中略）作者は正木典嗣の創造に自分の思念、情感、知識の何もかもぶちこんだのである。<sup>16)</sup>（傍点、引用者）

あるいはまた、「散華」（1963年発表）<sup>17)</sup>における創作態度について俎上に載せた川西が指摘した以下の「作家」高橋像は慧眼であろう。『悲の器』同様、予想される苦悩自体をも、まさに観念的な創作過程において色濃く自らによってのみ背負われ続けたのである。

このように黙示録的世界の領域へまで想念を観念化してみせた高橋和巳の想像力は、その黙示録的世界の観念を背負った人物を現実世界へ還行させずにはおかないとするところにある。それは元来矛盾した操作であるといえよう。だが高橋和巳はあえてその矛盾の総体を引き受けようと志すのである。<sup>18)</sup>

そして、渡辺広士による「知識人の虚構と倫理」内の文言は、高橋の文学作品における「知識人」とその欺瞞性に連なる思想構造の基軸のひとつを提示している。

「悲の器」「墮落」「我が心は石にあらず」そのほかの作品に共通しているのは、この安定社会に自己をある低からぬ位置に組み込んでいる知識人には必ず虚偽意識がある、という思想である。（中略）

高橋和巳において知識人の倫理とは、それ自身の崩壊において現代知識人の苦悩をあらわすべきものなのである。そしてこの苦悩は、信すべきものを信ずることができない故に、逃避し隠れようとする自己と闘う苦悩である。（中略）

崩壊に向かった筋の進展は、知識人としてのプチブル意識をあばき出す過程とならねばならない。<sup>19)</sup>

いずれの作品にあっても共通項となり得た、それら「知識人」論で指弾されていった欺瞞性という特質は、権威主義的要素を多分に孕んでおり、高橋によって論難され徹底的に忌避される。このことは同時に、現実世界の状況内における権威主義的要素の回避がかれによって希望されたことでもある。確認するまでもなく、それら「知識人」から「大学教員」が免れることはあり得ない。すなわち、端的には既存の、ひろくは時代的相違に関係させることなく、個別的な「大学教員」の具体的教育内容や方法、また「教育（的）関係」をめぐる言動あるいは「行為」を、高橋は徹底的に懐疑するのである。そしてそのことは、「大学教員」を思想的に醸成する、存在自体にかかわる、幾多の諸要素の欺瞞性に対する懐疑であった。

### 3. - 2. 三島由紀夫との対談を通して、およびその周辺から

このことは、「学生運動／学園闘争」の高揚期、最盛期たる1969年11月、「大いなる過渡期の論理」と題された三島由紀夫との対談において顕著に指摘できる。かりに、「保革」なる政治思想（史的イデオロギーにのみ依拠し立脚した観点にたつ者ならば、三島と高橋とはおよそその両極に据えられる「政治〔思想（史）〕」的な対



立的位置をとるかもしれない。だがそのような捉えかたは、いかにも教条的観念に執着した二項対立的な、しかもいわば軽率な認識の域を出ていないと論難されても仕方あるまい。もちろん、対談をつうじて、明確に、互いが頑なに断じて譲ることのない思想的要諦にかかわる箇所は容易にみつげられる。とはいえ、それを諒解したうえで、対談において二人がリズムよく共鳴しあっている箇所が複数見当たる。その理由を明察するかのようには、新潮社編集部の編集者であった徳田義昭の論考のなかに、高橋の内面における三島観が推察された箇所がある。「思想的な立ち場(引用者注:原文ママ)は違うにせよ、相互に拮抗しあっている敵手に対して抱く特殊な感情をもっており、(以下略)」<sup>20)</sup>。二人が共鳴しあっている明解な内容。その重要なひとつが、「大学教員」の欺瞞性をめぐる指摘に関するものである。対談における以下のやりとりをみてみよう。

**三島** だけれども大学教授は無力だから、この人たちの言うことをきいていけばまちがいないだろうというので信用を博した。(中略) 軽井沢あたりをベレー帽かぶって歩いていけばみんな尊敬する。

そういう人たちはたいていサロンで政治がどうだ、権力がどうだと議論している、いつも白い手袋でね。そういうのが戦後知識人の代表だったけれども、ひとたびアカデミックな世界の中で力というものが動き出すと、力との対照において、今まで無力の新鮮さだけが見られたのに。こんどは無力の惨めさ、醜さがはっきりしてコントラストが際立った。なんだ、学生に殴られて、言ってることがちがってきたぞと、世間が信用しなくなっちゃった。最近、大学教授がとかく問題になっているけど、結局はそれだけの話じゃない？

**高橋** そうですね。少し別の観点から言いますと、大学教授というのは嘘を言わない人々のようなイメージがあったんですね。

**三島** そう。

**高橋** (中略) 大学教授というのは、そういう事実の伝達じゃなくて、事実を改善したり理念化したりする過程で本当のことを言ってるんだらうという信頼感があったと思うんですね。ただ、いったん大学の内部から教授たちが凭りかかっている制度そのものに対する批判が高まりますと、大学教授も政治家とはそうちがわれない対応と表現をしてしまった。そして結果は大学教授にとどまらず、言語表現全体に対する不信が高まりましたね。(中略)

言語に対する信頼感はばたばたと崩れてしまい

ましたけれども、これをどこで食い止めるかによって日本の戦後の精神のあり方、言語にたずさわるものの帰趨は決まるんじゃないでしょうか。ただ、それが直ちに政治的な変革につながるというふうには、ぼくは思っていません。

**三島** 高橋さんが根本的なこと言っちゃったけれども、(以下略)。<sup>21)</sup>

状況をめぐる象徴的問題を言語表現への不信という文脈に敷衍させながら、高橋は三島と類似的に、「大学教員」の欺瞞性を論難する。そもそも、同年、三島との対談以前に編纂上梓された『変革の思想を問う』の「あとがき」において、同様の文脈を察知可能な叙述を明示している。

ことの起りは政治の場で従来なされてきた言語表現が、何ごとかを開示するものであるよりも隠蔽するためのものであり、追及するためのものであるよりもごまかすためのものであったことの確認に発するが、制度改変の問題が学園内にもちこまれてみると、政治とは次元をことにして、〈真理〉究明の場であったはずの大学内の言語も、結局は同じ隠蔽と曖昧化と無責任の法則に従うものであったことの発見と幻滅が、一挙にことを精神の領域に普遍化した。<sup>22)</sup>

欺瞞性への論難は深刻である。とはいえ欺瞞性へのいたずらな論難に終始することはなかった。合理的認識にのみ依拠していたわけではない。高橋の着想にあっては、絶え間なく、人間の情感や情念へのまなざしが明らかに指摘されてくる。「大学教員」の存在自体の欺瞞性をめぐって自問的に迷うゆえ、行為における真摯な態度を必死で探求し、まさに苦悩の内であった少数の「大学教員」という位置にあった人間をとり上げ、悲憤のなかで論じている。「文学者の生きかたと死にかた」と題された鼎談での高橋を引用する。

ここ二、三年来のインテリゲンチヤの死の中で、一番私にとって気がかりな、具体的に哀惜の文を書き、かつ鎮魂してあげたい方々というのは、(中略) 私たちのことばでは学園闘争ですが、その過程の中でほんの五、六人ですが、大学の先生が自殺しているわけです。(中略) おなかに庖丁を突き刺してなくなった方もいますし、山に入って行って睡眠剤を飲んで、腐爛死体になって発見された方もいますし、半狂乱になって死んだ方もいるわけです。そういう方々の死は残念ながら一度新聞の社会面の二段組みぐらいの記事に載るだけで、すぐ忘れられていって

しまっているんですけども、その人たちの苦悩は私にはよくわかるような気がします。おそらく、当局と学生の板ばさみになって、最も誠実に悩んだ方たちに違いない。<sup>23)</sup>

評論はもとより対談においても、『悲の器』や「散華」を中心にしながらの先の指摘同様、欺瞞性をめぐる〈批判〉の言辞は、「大学教員」の行為と存在自体が孕む権威主義的要素に対する批判であり、それら欺瞞性の徹底的忌避として指摘される。

高橋にとってその問いは、みてきたように、ひたすらに自己の問題として直截的に自身に映じ、内省され、そのさい、人間の情感や情念を捨ておかない批判的視座により論難された。そこには実存的な、「葛藤」の連続と連鎖が内奥に存していたのである。

#### 4. 結論にかえて

——「葛藤」という純粹性、その「思考」の教育思想的意義

以上論じてきたように、「大学教員」を中心とした「知識人」に関する高橋の指摘が明らかになったが、思想的共通項として指摘できるいまひとつの重要な特徴がある。

直前最後に触れた、人間の情感や情念の問題を主軸のひとつに据えた、精神的態度である。

高橋にあっては、構造的、制度的問題として「解決」することを合目的、問題处理的方策に拠って安易に掲げなかった。磯田光一が「有罪性、希求の文学」と題し、高橋追悼の叙述において端的に論じている。

氏の心に宿っていた暗い情念は、作品をも破って氏を実践者にまで仕立てあげていったのである。このとき高橋氏にとって、戦後の合理的な知性は、なんと白々しく見えたことであろう。(中略)それは「散華の精神」を肯定する立場とも、一方的に断罪する立場とも異なっている。ましてや、その肯定・否定を未来に役立てようなどという成心はまったくない。<sup>24)</sup>

そしてこのことをめぐっては、いわばもがきながら、高橋自身によって示された学問的態度に関する文言が理解をたすける。(「学問論」には)「一方に制度問題があり、(中略)次には制度とかみあう精神と態度の問題があり、それは要するに何のための学問かという問(引用者注:原文ママ)に要約される。(中略)……人は高い抱負を懐きつつも、常に、具体的な、つまりすでに存在する形態か

らしか出発することはできず、一見くだらないことの処理からはじめねばならない」<sup>25)</sup>。

高橋にとって「大学教員」という「知識人」とその存在をめぐる問題は、語意解釈の振幅を差し引いても「理性的」態度を状況における「正統」とみなす精神性への批判であり(それは、どのような衣装を纏って語られようとも「正統」の君臨への忌避でもあり)、とはいえ自身も、既述のような矛盾的存在であることをめぐって沈潜するがごとく「葛藤」から逃れられないのであって、そのさい情感や情念、また、冗長的関係性、あるいは想像的世界をいさぐ(いだいた)人間の問題への注視は不可避であった。三島との部分的な共鳴性の遠因、あるいは中核的要素のいまひとつも、そこに存するとも推察されよう。折にふれ「戦後民主主義」の虚実が浮き彫りになった「大学教員」の実相は、学問的態度と、人間の「生」における(個別的な)精神的態度とをめぐって、少なくとも高橋にとっては、「思考」することにより苦悩し、煩悶せざるをえなかった。諸相を割り切れない「葛藤」は、精神的態度の根源性としての純粹性と推察されるのではないだろうか。

だからこそ、高橋自身がまさに「葛藤の人間」と題して以下のごとく問題提起的に述べたのではないか。「人間を葛藤的・構成的存在としてとらえるため、さらに個別者の省察を開かれた磁場で重畳させるために、己れみずからの省察を提示するいささかの準備と覚悟はある」<sup>26)</sup>。

しかしながら高橋は、〈文学〉を以てしても皮相な「問題解決」に至らなかった。梅原猛が「文学は自己指弾か」<sup>27)</sup>として高橋を悼んだのもそれゆえである。およそ資格取得的な「新自由主義」的有用性を人間生活の重要な目的とする者からは、嘲笑の対象として揶揄されること畢竟であろうが、そのような「主体」的な思考停止を論理的に批判可能な「生」を確信した精神的態度に立脚してみるならば、これまで証してきたように、少なくとも、ひとつの哲学的人間的意義をもちえよう。上記文脈での「葛藤」は高橋における詩的要素であり、同時にアクチュアリティのひとつとして指摘可能である。

いずれにせよ、みてきた文脈からの、「葛藤」、また、それらをめぐる精神的態度は、「知識人」論に絡んだ「大学教員」のレゾン・デートルを、冒頭に提示したような現代的情况において問うなかで、あらためてひとつの、大学教育をめぐる根源的な問い、その視角の端緒となりえないであろうか。「大学教員」なる「存在」自体の欺瞞性への注視や徹底的な懐疑も同様である。不易流行による総括を越えて、とはいえ普遍による理性的回収からもノマド的に逃れながら、あるひとつの個的な、人間の問題として。高橋の師でもある吉川幸次郎の哀悼と、真継伸彦による追悼論文、またさらに、生前高橋と交流



をもった編集者小山晃一による回想と、以下のいずれもが、その象徴的明証たり得るであろう。最後にいま一度、それらを順に引用することで結びにかえたい。

嘗つて私は君と六朝の詩人たちを論じ、(中略) そうして君の最も敬愛した陸機、(中略) みな平常の死を得なかったことに言及したときには、高橋よ、君は感慨を發して、本当にそうですね、といった、君の病によっての死は、人人の死と同じでないけれども、高橋よ、私は嘗つての君の感慨と、似た感慨を抱かざるを得ない、(以下略)<sup>28)</sup>

反対に、平常の彼は、口頭で相手を論難することもなかなかできない内気な気性だった。『わが解体』のなかの、自身が属する教授会の欺瞞性や、あるいは、党派がことなれば、片眼を挫滅した学生の治療もこぼむ医学部某助教授の非人間性の告発などはたしかにすさまじいが、彼は密室にこもって自分を斬りきざんだあとで、はじめて勇敢に相手を告発する人だった。<sup>29)</sup>

他者への「やさしさ」「思いやり」は、同じベクトルで、自己への「厳しさ」となって、あなた自身を責め苛み、究極的に、破滅へと追い込んだのかも知れません。<sup>30)</sup>

#### 注

- 1) 奥浩平『青春の墓標——ある学生活動家の愛と死——』文藝春秋、1965年、p.228。
- 2) 清水みのる作詞、利根一郎作曲、菊池章子・歌「星の流れに」、テイチク、1947年。
- 3) 内田樹『街場の教育論』ミシマ社、2008年、pp.204・205。
- 4) 田中智志「教育の本態」、田中智志編『〈教育〉の解説』世織書房、1999年、p.12。
- 5) 高橋和巳「あとがき」、『生涯にわたる阿修羅として——高橋和巳対談集——』河出書房新社、1970年、p.458。
- 6) 高橋が京都大学の学部時代に専攻した「専門教育」は中国語学中国文学専攻であり、爾来、大学院博士課程修了まで、学生時代の「研究」の中心は中国古典文学研究であった。なお、文学部時代の主任教授は吉川幸次郎。
- 7) 高橋和巳『悲の器』河出書房新社、1967年。
- 8) 高橋和巳「内ゲバの論理はこえられるか〈上〉——新左翼のリンチ事件に関連して——」、『エコノミスト』1970年10月20日号、毎日新聞社、1970年、p.63。
- 9) たとえば、「さわやかな朝がゆの味」において描かれた「想い出」をめぐる随想から、少年期の高橋に映じた大阪の風景が端的かつ鮮明に見出される。「路地にはおおよそ緑の気配などなかったのだが、記憶の中では、(中略) その大阪の下町の貧しい路地にも夏には木蔭があり、秋にはばらばらと葉が散っていたような気がどうしてもする」、「そのさらさらとした朝がゆの味はいまも思い出すことができる」、「当時なお世間は平和で、貧しい人々もあまりこせつてはおらず」、「家の中が狭いから、夕涼みの将几は戸外に置かれたまま、星の光を受け、自転車なども小口にたてかけられたままだったように思う」(高橋和巳「さわやかな朝がゆの味」、『こども部屋』1967年11月号、こども部屋社、1967年、p.76) といったような言辞に明らかである。そもそも、「さわやかな朝がゆの味」との表題設定自体から、高橋に映じた情感的要素がじゅうぶんに含まれていることは容易に推察されよう。
- 10) 川西政明「解題」、『高橋和巳全小説8 墮落 散華』河出書房新社、1975年、p.137。
- 11) 高橋和巳「失明の階層」、『中央公論』1963年10月号、中央公論社、1963年、pp.88-90。
- 12) 高橋はこのことをめぐる危惧を、「庶民」をめぐる状況内の陥穽と、それに対する警鐘の文脈から論じている箇所も見当たる。以下はその例。「(前略) しかも、多くの人々は、個人の自立の苦渋には耐えられない。その間隙をぬって、現世利益的な誓約共同体がふたたび登場してくる」(高橋和巳「戦後民主主義の立脚点」、『展望』1965年8月号、筑摩書房、1965年、p.67)。
- 13) 高橋和巳「暗殺の哲学」、『文芸』1967年9月号、河出書房新社、1967年、p.238。
- 14) 高橋和巳「非暴力の幻影と栄光——東洋思想における不服従の伝統——」、『思想の科学』1961年7月号、思想の科学社、1961年、pp.17-18。
- 15) 高橋和巳『わが解体』河出書房新社、1971年、p.9(初出、高橋和巳「わが解体」『文芸』1969年6月号・7月号・8月号・10月号、河出書房新社、1969年)。
- 16) 桶谷秀昭「述志——運命への問い——高橋和巳論——」、『文芸 高橋和巳追悼特集号』7月臨時増刊号(第10巻第8号)、河出書房新社、1971年、pp.117・118・119。
- 17) 高橋和巳「散華」、『文芸』1963年8月号、河出書房新社、1963年。
- 18) 川西「解題」、前掲『高橋和巳全小説8 墮落 散華』、1975年、p.134。
- 19) 渡辺広士「知識人の虚構と倫理——『我が心は石にあらず』論——」、小田実・開高健・柴田翔・真継伸彦編『人間として』第6号／高橋和巳を弔う特集号、筑摩書房、1971年、pp.158・160。

- 20) 徳田義昭「醜を覆す」、前掲書、p.343。
- 21) 三島由紀夫・高橋和巳「対談 大いなる過渡期の論理」、『潮』1969年11月号、潮出版社、1969年、pp.78-80。
- 22) 高橋和巳「あとがき」、小田実・高橋和巳・真継伸彦編『変革の思想を問う』筑摩書房、1969年、p.259。
- 23) 野間宏・高橋和巳・秋山駿「文学者の生きかたと死にかた」、『群像』1971年2月号、講談社、1971年、p.156。
- 24) 磯田光一「有罪性、希求の文学——『散華』『墮落』『憂鬱なる党派』を中心に」、前掲『文芸 高橋和巳追悼特集号』、1971年、pp.55・56。
- 25) 高橋和巳・京都大学文学部共闘（11名）「存在変革への執拗な問い——京大L（文学部）共闘の模索——」、前掲『変革の思想を問う』、1969年、pp.97・99。また以下。「私にとって、（中略）文学の研究衝動は、対象の理性的分析というよりは、異国であれ自国であれ、過去であれ現在であれ、他者の精神の文学的部分、つまりはイメージや感情を共有してみたい衝動に発する」（同書、p.100）。
- 26) 高橋和巳「葛藤的人間の哲学」、『思想』1962年11月号、岩波書店、1962年、p.59。
- 27) 梅原猛「文学は自己指弾か」、前掲『文芸 高橋和巳追悼特集号』、1971年、pp.61-66。
- 28) 吉川幸次郎「哀辞」、前掲『文芸 高橋和巳追悼特集号』、1971年、p.19。
- 29) 真継伸彦「高橋和巳の倫理」、前掲書、p.164。
- 30) 小山晃一「高橋和巳氏へ」、前掲『人間として』第6号／高橋和巳を弔う特集号、1971年、p.346。